

## 茅盾の性慾描寫論と『蝕』

### 『野薔薇』における性愛

三 枝 茂 人

京 都 大 學

はじめに

茅盾<sup>(1)</sup>は、中國現代文學を代表するもつともすぐれた長編作家として知られている。「史詩」とも呼ばれる彼の作品の魅力は、なんといってもそのスケールの大きさにあろう。従來の研究が、『子夜』をはじめとする長編小説を歴史や社會との關係から論じることが多かったのは、このような理由に由る。茅盾の短編小説の中でも、『林家舖子』『春蠶』など社會的問題を扱った作品に多くの研究がなされたのは、そのような長編研究の延長綫上にあると考えてよいだろう。しかしその一方で、茅盾が創作活動を始めた頃の一九三〇年以前の短編小説、とりわけ『野薔薇』に收められた諸篇

はこれまで論じられることが比較的少なかった。それは、一つには『野薔薇』<sup>(2)</sup>が作品として成功したとは言いがたからであろう。だが、そのことはまた別に、ここでは中國の文學には珍しく性が取り上げられているという事實も見逃すことはできないのである。おそらく後者の理由が、性の問題には慎重な研究者たちをして『野薔薇』に觸れることを躊躇させているのであろう。しかし、のちに述べるように、茅盾は作家となる以前から性の問題に關心を持ち、しかも文學との關係でそれを論じているのである。本論文は、長編三部作である『蝕』<sup>(3)</sup>、及び最初の短編小説集である『野薔薇』を取り上げ、それを茅盾の性慾描寫論と比較しながら、性愛と文學を彼がどのようにとらえ作品の中で實踐していったかを論じたい。

—

作家となる以前の茅盾が、文學研究會の一員として、『小説月報』の全面改革を實行し、西洋文學・文藝思潮の紹介、評論翻譯活動を精力的に行なつたのは周知の事實だが、他

方、文學以外では婦人問題の分野でも、積極的に歐米の婦人解放思想・解放運動の紹介を行ない、様々な問題に言及している。一九一九年の終わり以降、彼が『婦女雜誌』『民國日報』などに發表した文章はかなりの數にのぼり、また内容も多岐にわたっている。いまここでそれを論じている餘裕はないが、彼の性愛觀を採るのに必要と思われる點を一つだけ挙げておく。婦人問題の中でも茅盾が特に力を入れているのは、結婚や戀愛における性道德である。彼の戀愛觀・性道德觀の形成にはスウェーデンの婦人運動家エレン・ケイのその影響がきわめて強いと考えられる。茅盾は一九二〇年の始めから、自己の主張をエレン・ケイに倣って男女間の「新道德」と名付け、傳統的な性道德を徹底的に批判していく。時間の経過とともに若干のニュアンスの違いはあるが、きわめて簡単に言えば、彼のいう「新道德」とは、男女間の完全な平等と戀愛の神聖にある。男女間の完全な平等とは、特に貞操の問題を指しており、女性だけが貞操を強要されることの不合理に茅盾は反對している。戀愛の神聖とは、戀愛はそれ自體が他の何ものによっても

茅盾の性慾描寫論と『蝕』『野薔薇』における性愛(二枝)

束縛されてはならず、愛情のみを基礎として成り立つものであることを述べているのである。茅盾は貞操について、何年にもわたって言及し続けるが、その背後には、戀愛は性を必ず伴うとする彼の戀愛觀が存在しているからである。茅盾はエレン・ケイの紹介を始める二カ月ほど前に、『一個問題』的商榷<sup>(5)</sup>と題する一文を書いて、結婚と戀愛とは區別して考えるべきことを述べている。そして最後にわざわざ注を附して、「この文にあるすべての『戀愛』(という語)は性的戀愛(原文 性的戀愛)を指し、すべての『愛情』(という語)は普通に言う愛を指す。」と彼の考える「戀愛」の自身を説明している。このことから、茅盾は婦人問題に關わりはじめたきわめて初期の段階から、戀愛ははじめから性を含めて考えるべきとする戀愛觀を抱いていたことがわかる。では、文學は性をどう扱うべきなのか、次に茅盾の主張を検討していきたい。

## 二

茅盾は文學活動を開始した時から、すでに「人生のため

の文學」を標榜し、中國に最も緊要なものとして寫實主義・自然主義を倡えたことはよく知られている。ちょうど茅盾が『學生雜誌』や『時事新報』などに文章を寄稿しはじめた一九二〇年八月、『解放與改造』誌上に文學革命に反對したことで知られる胡先驩の『歐美新文學最近之趨勢』が掲載された。このなかで胡は、寫實主義・自然主義の文學に否定的な自己の見解を表明した。とりわけ、ドイツ・フランス・ロシア文學の缺點として「喜びて男女性を敘述描寫すること」を挙げ、これらの文學は十に九は「男女性の罪惡」を描いているため、青少年に惡影響を與えるとしている。さらに、「我國の小説戲劇は素より喜びて男女狎媾の事を描繪すれば、則ち毛柏桑・搓拿の寫實主義・自然主義を崇拜せる文學家は、恐らくは亦法を法人に效うの趨向有らん、此れ則ち甚だ宜しく引きて以て戒めと爲すべき者なり。」と述べ、なかでもゾラ・モーパッサンに代表される自然主義が好ましくない影響を中國に及ぼすことを憂慮している。

この胡先驩の文章に對して茅盾は、短い批評文『歐美新

文學最近之趨勢』書後」を『東方雜誌』に寄せ、寫實主義・自然主義に對する非難に一定の反論を行なつた。白話文の批判者である胡に、彼は珍しく文言で反論を行なつてゐるが、その中で「男女關係の小説」について、以下次のように彼の考えを述べてゐる。

如し胡君詆る所の醜惡描寫文學を謂いて男女の事を言ふの文學と爲さば、則ち余以爲く、西洋の男女の事を描寫するの文學は、固より未だ中國演義小説の動もすれば言生殖器に及ぶが如きにあらざるなりと。中國此の類の小説を并わせて之有れば、則ち青年道德の墮落の責、當に此に在りて彼ならざるべし。且つ男女の事、人生の一神祕なり。之を關さずも可ならず、之を閉さずも能はず。中國惟だ薦紳先生のみ以て言を爲すを差づ。故に愛情生活兩性關係を眞寫するの書一冊も無くして、誨淫の書、乃ち多きこと牛毛の如し。余故に以爲く、男女關係描寫すべからざるにあらず、特應に中國の金瓶梅等の如くなるべからずと。中國の小説凡そ情愛を言えば、即ち淫褻に涉る。正に當に西洋の男女

關係を言えるの小説を引きて以て其の弊を矯むべし。宜しく反拒して受けざるべからざるなり。<sup>9)</sup>

茅盾と胡先驥との間には、自然主義に對する評價の違いがある。ヨーロッパでもそうであったように、自然主義の小説に對し一讀して起こる反發は、それが性をあからさまに取り上げていることにある。フランスにあつては、ゾラは爲に『テレーズ・ラカン』の第二版に有名な序を書き、興味本位な讀者に強い不滿を表明し、かつ彼の眞意を説明せねばならなかつた。中國にあつても、この時期自然主義を提倡する者はどうしてもこのハードルを乗り越える必要があつた。胡先驥に對する茅盾の反論は、一九二一年から二二年にかけて盛んになる自然主義をめぐる論戰のいわば前哨戰と見做されるが、茅盾自身はしかし、自然主義を全面的に肯定していたわけではなく、それが社會の闇黒を暴露しながら未來社會の光明を示さぬことに大きな缺點を認めるといふ一定の留保を含むものであつた。ただ、茅盾は文學が性を正當に扱うことを否定しない。茅盾のいう「男女の事」が性を指しているのは明白であるが、それは

茅盾の性慾描寫論と『蝕』『野薔薇』における性愛(三枝)

「人生の一神祕」ではあれ、隠すことのできぬ人生の側面であつて、愛情生活・兩性關係の眞實に迫るためには文學はこれをどうしても描寫せねばならぬのである。とはいえ、その場合でも、あくまで「愛情生活兩性關係を眞寫する」ことに意義があるのであつて、「情愛を言へば、即ち淫褻に涉る」金瓶梅などの中國の淫書は、このような原則に反するとして否定される。彼は胡先驥のように、いかなる性愛描寫であれ、それを含めば等しく淫書であると思ふ考へには同意しない。つまり西洋の小説(主として自然主義のそれが擬せられるが)と中國の誨淫の書における性愛描寫は根本的に異質であつて、同列には論ぜられぬというのが茅盾の立場である。さらに、「正に當に西洋の男女關係を言えるの小説を引きて以て其の弊を矯むべし。宜しく反つて拒みて受けざるべからず。」とあるように、西洋の小説を模範として、新たな性愛描寫の導入・革新を提倡したことは、單に自然主義の小説への辯護という以上に、彼が性というものをきわめて重視し、積極的に文學として取り上げようとしていたことの表れといえよう。性愛描寫に

おいて西洋の小説と中國の淫書とを對比させ、前者を高く評價し後者を否定するこのような矛盾の觀點は、引用した『歐美新文學最近之趨勢』書後」のほかに、「自然主義與中國現代小説」などの文章にもみられ、彼の性愛描寫論の基礎をなしていると考えられる。

戀愛Ⅱ性的戀愛とする矛盾の戀愛觀は、性を「愛情生活兩性關係」の不可缺の要素とみる矛盾の性愛觀からすれば當然であるとはいえ、彼がそれを文學と切り離さずに考えていたことが、以上から理解される。

『歐美新文學最近之趨勢』書後」から七年近くたった一九二七年六月、茅盾は『小説月報』第十七卷號外『中國文學研究號』に「中國文學內的性慾描寫」を發表する。この論文のテーマは、中國の舊文學にみられる性慾描寫をいかに評價すべきかにあるが、茅盾は『飛燕外傳』に始まる中國の淫書の變遷とその特徴を述べ、結論として淫書の性慾描寫が文學としてなんらの價值も有さぬと斷じている。だが、この論文は單に過去の遺産の評價だけではなく、同時

にその淫書否定の論の中に、文學的價值を持つと矛盾がみえず正當な性慾描寫のありかたが述べられている。少し長くなるがその主要な箇所を引用する。

「私は、性慾を描寫するのに赤裸々にもつぱら性交の状態を述べる中國のようなものは、古今中外に獨歩であると稱してよいと言いたいのである。私はまことに淺學で、西洋の小説を多くは讀んでいないし、とりわけもつぱら性慾を描いた小説はほんの少ししか讀んでいない。だが、赤裸々に性慾を描寫した西洋の小説として世に稱せられるもの、たとえばモーパッサンの『ベラミ』の類は、その中に目を覆うばかりの篇章（これは譯者はそのまま譯すを願わぬ）があるが、しかし、中國の小説の中の性慾描寫に比べれば、なお見劣りがすると言わざるをえない。モーパッサンの『女の一生』にも性慾描寫が頗る雅馴ではないところがいくつもあるが、全體としてはやはり情理の内にある、中國の性慾描寫が情理の外に出るのは違う。（中略）モーパッサンの多くの短編は淫蕩きわまりないが、性交に

ついでにはやはり虚寫であつて、中國の小説のような實寫ではない。(中略) 通例、性慾描寫の文學はたいていみな變態性慾の研究である。ところがおどろいたことに中國の性慾文學は例外なのである。(第一章)

「そこで我々は、中國文學の中の性慾描寫は始めから惡魔の道に入りこみ、中國をして正當な性慾描寫の文學をなからしめたと言わざるをえない。性慾描寫の目的は病的性慾——これは一種の社會的心理的病であり、研究に値する——の表現にあることを我々は知らねばならない。病的性慾を表現したのであれば、性交描寫を多くする必要はないし、とりわけ『房術』を描寫すべきではない。(第五章)

茅盾の意圖が、西洋の小説と中國の淫書の性愛描寫を對比させ、中國の淫書を否定的媒介として、文學的意義をもつ新たな性慾描寫の提倡にあつたことは容易に理解される。そしてその場合、あるべき性慾描寫の模範とまでは言わぬにせよ、大きな手がかりとして十九世紀フランスの自然主義の作家、モーパッサンの作品を挙げ、その「情理」を重

茅盾の性慾描寫論と『蝕』『野薔薇』における性愛(二枝)

んじ、「虚寫」を用いる手法を高く評價している。このよ  
うな發想は、一九二〇年九月に茅盾が『歐美新文學最近之  
趨勢』書後で述べた「正に當に西洋の男女關係を言える  
の小説を引き以て其の弊を矯むべし」とする考え方とほ  
んど同一であり、「中國文學内の性慾描寫」では、さら  
に「性慾描寫の目的」を付け加えることによって、一つの  
性愛描寫のありかたを示している。

では、茅盾の性慾描寫論を少し詳しく見てみよう。まず  
モーパッサンに對する辯護だが、モーパッサンの作品は、  
「全體として情理の内」にあり、性交については「虚寫」  
であつて「實寫」ではないことの一「點を擧げている。「情理  
の内」にあるとは、小説の筋や登場人物の感情の自然な流  
れの中に、性慾描寫が讀者に異和感を感じさせないまま取  
り込まれているのを言うのであろう。これに對して「虚寫」  
とは、性行爲をそのものズバリとかくのではなく、讀者に  
それを暗示させる書き方を指すと考えてよい。「情理の内」  
と「虚寫」とは中國には從來なかつたものとして茅盾は肯  
定的な評價をあたえている。さて、この二點が敘述ないし

は描寫の問題として擧げられてゐるのに對して、性慾描寫の目的としては矛盾は「病的性慾の表現」を擧げてゐる。

また、「變態性慾の研究」という言葉も用いてゐる。「病的性慾」「變態性慾」の意味するところは必ずしもはっきりしないが、矛盾が「中國文學內的性慾描寫」の第五章で、『金瓶梅』の主人公西門慶を「色情狂」と呼び、彼のサデ

イスティックな行爲を中國特有の現象として嚴しく非難していることや、『幻滅』の第六章で、過去の男性體驗から男への憎惡を露わにする慧女士について、主人公章靜の口から「變態心理」と言わせてゐることからみて、それらが所謂性的倒錯を指すものではないことは理解される。「病的性慾」は「一種の社會的的心理的病であり研究に値する」とする言い方からうかがえることは、矛盾のいう性慾描寫の目的とは、性愛描寫それ自體が描寫の目的ではない、つまり、作家がエロスを表現したいという強い慾求にかられて性愛をとりあげることでもなく、また作中人物の純粹に個人的な嗜好として性愛が描かれることでもない。そうではなく、登場人物の歪められた性的行動・意識(どのような

状態が歪められてゐるとするかはひとまず置くとしても)を通じて、社會が生み出した様々な病理を解き明かすことに眞の目的があると見えよう。またそうであればこそ、創作にあつては「情理」と「虚寫」とが重んぜられねばならないわけである。

矛盾のこのような性慾描寫論は何に由來するのであろうか。「自然主義與中國現代小説」の中で矛盾は、「自然派の作者は一つの人生に對して、完全に客觀的冷靜な頭腦で見ている。彼らも性慾は描寫する。ただ、彼らの性慾の見方では、(性慾を…引用者)まったく孝悌義行同様に扱ひ、猥褻と見えぬし、また浮薄にも流れない。ただ讀者に一つの悲哀の人生を見せ、彼が描寫するものが性慾である事を忘れさせるのである。」と述べてゐる。これは、「畫家は裸體を寫生しながら、かりそめにも情慾など感じないのに、批評家から畫の生き生きした肉體がわいせつだといわれたら、あつげにとられてしまうだろう。私の立場はまさに、その畫家の立場と同じだった。(中略)道德のおすきな連中は、この小説『テレーズ・ラカン』…引用者を卑猥とおっしゃる

が、私は意識的に卑猥なものを盛りこもうなどとは、一瞬たりとも思わなかったことだ。なぜなら、どの場面でも、どんなに熱っぽい場面でも、もっぱら學者の好奇心で書いたからだ。」とするゾラの言葉をより整然と解説したものと見える。また、「中國文學内の性慾描寫」の「性慾描寫の目的は病的性慾——これは一種の社會的心理的病であり、研究に値する——の表現にある」とする茅盾の目的論は、これも同じくゾラの「かれら（ゾラの理解者；引用者）の結論がどんなものになるかはともかくとして、私の出發點、つまり體質の研究、環境と情況の壓力のもとで、人間という有機體がどれほど深い變化をうけるかという研究は、みとめてもらえるだろう。」とする考え方と同一綫上にある。性愛描寫をする際に作家のとるべき態度、その目的という二點で、茅盾が多分に自然主義の影響を受けていたことは、ほぼ間違いない。

彼の「中國文學内の性慾描寫」は、『小説月報』の出版後すぐに商務印書館内の保守派の反對にあつて削除されたため、その影響や反響はほとんどなかったと思われるが、一

茅盾の性慾描寫論と『蝕』『野薔薇』における性愛（三枝）

九二七年の時點で性を文學として積極的に取り上げ、自分なりの價值觀と方法を示したことは、おおいに評價できよう。

### 三

さて、「中國文學内の性慾描寫」が發表されて一月餘り、七月半ばに武漢政府は瓦解する。當時『漢口民國日報』主編であつた茅盾は、地下に潛航し、牯嶺に滞在ののち八月には上海にもどる。茅盾は國民黨の追求を逃れるべく自宅に籠りきりになるが、結局これが茅盾つまり沈雁冰が作家となる契機となつた。この年から翌一九二九年にかけて、後に『蝕』と總題される『幻滅』『動搖』『追求』の三篇の長編を書き上げ、七月には渡日する。それから一九三〇年四月に歸國するまでの間、茅盾は日本で多くの短編小説や散文を手懸けている。そして、この時期の作品は、それ以降の作品に比べ、性が比較的直接に扱われている。

以下、この期の作品、『幻滅』『動搖』『創造』『追求』『詩與散文』を執筆の順序にしたがって取り上げ、それらを「中



國文學內的性慾描寫」の性慾描寫論とも比較しながら、彼の性愛描寫の特徴を考察したい。

### 幻滅

『蝕』の第一部『幻滅』は、戀愛と革命に夢破れる女學生章靜の物語である。章靜はアナキストの抱素、虚無思想を持つ革命側の軍人強猛という二人の青年と戀におちいり、肉體關係を結ぶ。

周圍が國民革命の進展に沸き立つ中、政治にも學問にも身が入らず悶々と日を送る章靜は、ある日、親しい友人の抱素から失戀の苦惱を聞かされ、持前の「憐憫哲學」からふと體を許してしまう。

靜の手のひらから電流が走って、しばらく抱素の全身をかけめぐった。彼はしびれてぼうっとなり、何も考えられなくなった。本能的に靜の腰を引き寄せ胸に抱きしめた。靜は目を閉じぐったりとなって、抵抗もしなければ動きもしない。男性の熱い愛撫がひとしきり胸にとどまり、次に下へと移ってゆくのをぼんやり

と感じていた。かつて味わったことのないくすぐったさが彼女の全身を支配し、まるで體の關節がみなゆるんで解けていくようだった。意識が少しづつ奪われてゆき、ついにまったく自分自身を失った。彼女が意識を取り戻すと、抱素はベッドに横たわった自分のほほに顔をよせていた。

「君は氣を失っていたんだよ。」彼は低い聲で言った。

返事はなかった。靜は身を翻すと枕に顔を埋めた。

抱素は彼女の首のうしろに無數の口づけをした。

夕陽の赤い光が窗をしばらく照らし、またゆっくりとひそかに去っていった。部屋の中はしだいに暗くなりはじめた。

(第六章)

章靜は、抱素によって初めて性の甘美を知る。翌朝、彼女は抱素と關係を持ったことをこう考える。「完全に受身だったろうか。靜は良心に照らして『違う』と思った。いま細かく思い出してみれば、抱素の要求を強く拒むに忍びなかったのももちろん原因の一つではあったが、しかし大

半はやはり本能と好奇心に驅られたためであつた。」だが、抱素が置き忘れた手帳やメモなどから、彼がほかに戀人を持ち、さらにスパイ活動に携わっていることを知り、そのまま逃げ出してしまふ。こうして章靜の初めての戀はあつてなく終わりを告げる。章靜がつぎに愛したのは、武漢の病院に前綫から送られて來た青年軍人強猛であつた。強猛の看護をするうちに、二人はしだいにひかれ合い、強猛の傷が癒えると、二人は結婚を宣言し、牯嶺へと旅に出る。下界の喧騒を忘れて、章靜と強猛の二人は、新婚の喜びに浸る。

一週間の時が流れた。それは狂歡の一週、肉感の一週であつた。

毎日午前九時を過ぎてから、靜と強は果物と辨當を攜え山に遊びに行った。二人はお決りの名勝には決して行かなかつた。ただ足にまかせて行くのだった。月夜にはあの「西洋風の町並」を散歩し、人のいない別荘の花園に坐つて、冷たい夜露に服を濡らして始めて歸るのだった。愛の戯れ愛の撫弄が彼らが遊ぶ先々を

茅盾の性慾描寫論と『蝕』『野薔薇』における性愛(三枝)

満たしていた。二人は名勝の名を靜の肉體の各處につけた。靜の乳房の上端の突き出した處は「捨身崖」とつけた。というのは強がいつもそこに顔を埋めて放そうとしないからである。新奇な戯れが二人の毎日の唯一の仕事となつた。彼らは一切を忘れ、ほしいままに肉の享樂を追い求めた。(第十四章)

『幻滅』の性愛描寫は、いま引用した部分のほかに、章靜と強猛の野外での抱擁の場面がある。さて、性交については、第六章では、「夕陽の赤い光が窗をしばらく照らし、またゆっくりとひそかに去つていった。部屋の中はしだいに暗くなりはじめた。」と情景を短く付け加えてそれを暗示させるだけであり、第十四章では、「狂歡」「肉感」「肉の享樂」という語にすべてを含蓄させるだけで、いづれも具體的な描寫はなく、茅盾は「虚寫」に徹している。つぎに「情理の内」という點から見ると新婦の旅先での章靜と強猛との戯れは、それを書くべきか否かは問わぬとしても、ともかく自然な——異常とは言えぬ——行爲の表現と見做される。また、章靜と抱素の行爲は、抱素がたとえ

輕薄で不實な男であったとしても、それを知らぬ章靜の性愛心理の自然な流れとして描いており、「情理」を重んじる矛盾の姿勢があらわれている。このように、矛盾はその處女作の中で、「中國文學內的性慾描寫」で主張した「虛寫」と「情理の内」という方法をそのまま實行している。

第十四章では引用したように、章靜の體に地名を付け戯れる様が描かれている。この部分がモーパッサンの『女の一生』に酷似していることは、すでに佐藤一郎氏の指摘がある。性愛描寫といえは、すぐにモーパッサンをひきあいに出し、『女の一生』は名前まで擧げている矛盾のことであるから、『幻滅』のこの部分が『女の一生』を下敷きにしたことはほぼ間違いない。ただそれは、たまたま讀んだ小説の表現を借用したのではなく、「正に當に西洋の男女關係を言えるの小説を引きて以て其の弊を矯むべし」という矛盾の精神のあらわれ、中國における新しい性愛描寫の模索の中から生じたのだろう。「電流が走って」（原文傳來一道電流）という表現も、中國にはそれまでなかった表現であり、矛盾の探求の跡がみられるが、これも西歐から

の影響が認められるのではなからうか。

「虛寫」・「情理の内」は、上述したように『幻滅』の中でそのまま實行されている。あらかじめ結論をいえば、この論文で取り上げた小説の中には、「實寫」あるいは「情理の外」であるものは見當たらない。恐らく他の作品においても同様であろう。というのも、「虛寫」と「情理の内」という方法ないし態度を作者が採用するかどうかは、性愛描寫が淫書となるか「文學」となるかの分水嶺であって、淫書ではなく「文學」としての性愛描寫を指向した矛盾にすれば、それはどうしても譲れぬ最低限の條件であった筈だからである。したがって、「中國文學內的性慾描寫」の議論から矛盾の作品を考察する際に、特に問題となるのは、性慾描寫の目的論と作品との整合性にある。つぎに、性慾描寫の目的「病的性慾の表現」とする矛盾の理論から見ても、『幻滅』はどうであるのかを考えてみたい。

章靜の二番目の戀人強猛が以前抱いていた虚無的な思想は、章靜との戀愛と結婚とによって癒やされるが、強猛は戰場から持ち歸った心の傷手が、彼に何かしらの病的性行

動を引き起こすことはないし、章靜の方はといえば、過去の男性體験に惱んで、煩悶することもない。二人は至って健全であつて、「病的」という言葉から想像される異常な行爲や人格的な缺陷はどこにも見當たらない。また、のちにスパイとわかる抱素には他に戀人がいたにせよ、親しい間柄の章靜の部屋を訪れ、その時の情況で彼女と一夜を共にしたことをすぐに病的性慾とは言えないし、章靜にしても、完全に受身であつたとする意識がなかつたことから考へて、異常な行動とはみなされたい。またそうであればこそ章靜は、何のわだかまりもなく次の戀人強猛と幸福な結婚に踏み切れたのであろう。『幻滅』の性愛描寫から我々が讀み取れるものは、性は戀愛の——もう少し廣く言えば、人生の——確かな一部分を形造つており、それは無視も隠しもできぬ自然の營みであるとする考え方である。『幻滅』によつて、茅盾は、中國ではそれまでタブーであつた女性の性の問題を文學に持ち込んだだけでなく、若い未婚の女性にも性の關心や性慾が存在し、それを正當に認めることを章靜の意識や行動を通して主張したのだと言えまいか。

茅盾の性慾描寫論と『蝕』『野薔薇』における性愛(三枝)

だから、『幻滅』の性愛描寫は、若い女性のひそかな性慾本能や性の喜びを描くのに必要ではあつても、病的な現象を通して社會の病理に肉薄するためのもの、つまり「病的性慾の表現」とは考えられない。

### 動搖

『蝕』の第二部『動搖』は、湖北省のある縣城を舞臺に、革命權力が混沌とした情況に適切に對處できぬまま、押し寄せる反革命軍の前に崩壞する物語である。『動搖』は、政治を前面に扱つた作品でありながら、しかし政治とは一見無縁とも考えられる性について作者は重大な關心を寄せている。茅盾は『動搖』の中で、革命側では、孫舞陽の奔放な性行動や方羅蘭が妻と孫舞陽との間で引き起こす三角關係を扱い、反革命の側では、胡國光等に見られる腐敗した男女關係を描き、さらに農民運動では、「共妻」(妻の分配)の實態を取り上げている。このように、國民革命の行方を擔う、革命・反革命・農民という三つの主要な勢力の内部で繰り廣げられる男女關係の種々相を描いたことは、

矛盾の關心が單に階級間の力關係だけでなく、彼らの性觀念にまで及んでいたことを示している。ただ、性愛描寫という點では、『動搖』は『幻滅』のような細かな描寫は見られない。たとえば革命側では、性交の事實は、孫舞陽の上氣した顔としわになったスカートを描くだけで讀み取らせたり、茂みの中に見える孫舞陽と方羅蘭の衣服を描くことでそれとなく暗示させるだけである。『動搖』では、作者の性への關心は、行爲や感覺の描寫よりも、時代を擔ったそれぞれの勢力に典型的に見られる性意識とその相互のきわだった違いに向けられている。

この縣の婦女協會に省から派遣されて來た孫舞陽は、思わせ振りの行動で商民部長の方羅蘭の心を捉え、方羅蘭とその妻の間に不和の種を蒔くが、一方で家柄と美男だけがとりえの朱民生と關係している。彼女は方羅蘭に次のように語る。

私も血と肉でできた人間よ。本能の衝動もあるし、時にはどうしたって——けれど、こういう性慾の衝動は私を縛りつけられはしないわ。だから私は人を愛

したことなんてないわ。ただもて遊んだだけよ。羅蘭、私って恐ろしい女かしら？ ひどい女だと思つて？

そうかもしれない、違うのかも知れない。でも私ちつとも氣にしていなわ。ただ憂さ晴らしが必要なだけ。

性慾を自覺し、それを人間の自然な生理現象として受け入れることは、『幻滅』の章靜と同じだが、章靜のそれがあくまでも内心の獨話にとどまるのに對し、孫舞陽の場合には、それが言葉として男性に語られ、しかも愛を前提としない肉の充足を否定しない點で、章靜とははっきりと異なっている。矛盾は他の作品でもそうだが、孫舞陽のような女性に非難めいた言葉は一言も用いていない。それは、一つには『幻滅』『動搖』では矛盾は主觀を交えず當時の情況を可能な限り客觀的に再現しようと試みたからである。しかし、彼が婦人問題に關する評論の中で、肉慾の充足が主たる目的の「アナキスティックな『自由戀愛』」を度々批判していることを引くまでもなく、矛盾が孫舞陽の性愛觀や行動を全面的に肯定してはいないのは明らかである。矛盾は後に錢杏邨らの『蝕』への批判に答えて「從牯嶺到東京」

を書くが、その中で「慧女士、孫舞陽や章秋柳にしても革命的な女性ではないが、かといって淺薄な浪漫的女性でもない。もし讀者に彼女たちは、愛すべき同情すべき人物だと感じさせないのであれば、それは作者の描寫の失敗である。」と述べている。愛による救済という言葉がほとんど意味をなさない當時の情況にあって、疑いもなく存在する自己の内部の自然Ⅱ肉慾に忠實であることに個人の解放の意味を確かめるしかすべのない孫舞陽らに、茅盾は理解と同情を求めている。それは孫舞陽の性愛觀や行動が彼女一人のものではなく、時代がもたらした病態のゆえであると茅盾が認識していたからであろう。ただ、それをもって孫舞陽が「病的性慾」に侵されていたとは斷じられないし、それを示す描寫も存在しないのである。

方羅蘭の妻は、申し分のない魅力的な女性だが、方羅蘭は結婚してから家庭に引きこもってしまった妻に興味を失い、新時代の象徴のような奔放な女性孫舞陽に心ひかれ、離婚騒動まで引き起こす。この方羅蘭について茅盾は「從牯嶺到東京」で次のように述べている。

茅盾の性慾描寫論と『蝕』『野薔薇』における性愛(二三枝)

方羅蘭は、(中略)この新時代の性質が認識できなかったが、彼は現に黨の要職に就いており、過去を拂拭してしまふことはできない。そのため彼の思想と行動は明らかに動搖する。黨務や民衆運動において動搖するだけではなく、戀愛においても動搖する。現在我々は正面から人物の政治態度を描くべきであって、ツルゲーネフのように戀愛によって暗示する必要はないが、『動搖』の代表である方羅蘭はその行爲のすべてが動搖として描かれているのであるから、彼と孫舞陽との戀愛を描いた一段は、たぶん無駄ではないはずである。

ツルゲーネフを引いて、戀愛の背後に青年の政治思想や人生觀を見ようとすることのような見方は、すでに「自然主義與中國現代小説」の中に見られ、また後に「寫在野薔薇的<sup>前</sup>面」においても同様の主張が行なわれる。戀愛そのものを目的としないこの見方は、性愛描寫そのものが描寫の目的とはならない茅盾の性慾描寫の目的論と同じ論理である。したがって、三角關係を取り上げながら性愛描寫がほ

とಂದくないのは、方羅蘭の政治的動搖を見きわめる上で、性愛描寫にまで立ち入る必要がなかったことがその理由と考えられる。

一方、反動派では、陸慕游が寡婦を誘惑する場面を描いたり、女と見れば食指を動かす胡國光の亂脈な私生活を點描するが、そこでは性や愛についての獨自な主張は表明されず、單に生來の好色漢の姿が示されるだけである。茅盾は彼らの亂倫を描くことで、反革命がいかに救いがたく腐敗しているかを暴露することに焦點を置いており、「社會的的心理病的の研究」にまで立ち入っているとは思われない。

さて、第八章では縣城の郊外にある農村で演じられた「共妻」の有様が描かれている。これは後に胡國光が妾や寡婦を集めて「解放婦女保管所」をつくらせ自己の淫賣窟とする事件の遠因として比較的簡單に觸れられるだけである。茅盾は「共妻」について、短篇『泥濘』でも取り上げている。『動搖』にせよ『泥濘』にせよ、國民革命期の農民を描くのに、土地をめぐる地主と小作農との鬭争ではなくもっぱら「共妻」問題を茅盾が扱っているのはたいへん

興味深い。さて、『動搖』の中の「共妻」についてだが、農民にとつては「妻」も特殊な財産であつて、「共産」を行なうのであるならば、當然地主の妾や出家した尼僧も獨身に分配されねばならない。かくして五人の該當者を集めて、妻の分配大會が開かれる。五人の夫は抽選で決められるが、全く不條理なこの決定を、女たちはさしたる抵抗もなく受けいれる。戀愛の歸結として夫婦となるのではなく、妻を財産の一部としてしか見做さない農民の姿や分配大會の野蠻な有様を茅盾はありのままに『動搖』に描いている。

茅盾はこのように革命や政治とは一見無關係に見える男女關係や性觀念に十分な注意を拂っている。それは單に茅盾がこうした問題に特に興味を抱いていたからというだけではない。第八章では、街や村に「春」が訪れ、熱情的な火山の噴火が始まったことを述べるが、それは戀の情熱が人々の心を満たしそれに火がついたことを指している。陸慕游が寡婦を誘惑するのも、農村が「共妻」に沸き返るのも、胡國光が「解放婦女保管所」を考案するのも、みなこ

の「春」の訪れに原因があるかのように説明されている。茅盾は、革命の到来が生み出した混亂と解放的気分が、平時には抑制されていた戀の情熱を、階級や階層を問わずすべての人々に一氣に噴出させたことを敏感に感じ取った。このような事實が彼に『動搖』の中で性に注意を拂わせた原因であると思われる。そして、茅盾は同じ「春」がそれぞれの勢力によってまったく異なる様相を呈したことを作品で示している。女性を肉慾の對象としてしか見ない反動勢力、財産としか見做さぬ農民、そのような現實に慣れってしまった女たちは、ともに二千年以上にわたる中國の封建的な女性觀や性觀念に支配されたままである。また、孫舞陽はそうした傳統への挑戰者ではあるが、自己の考えや行為に十全の確信を抱いているわけではない。だが、それらは、方羅蘭の戀愛上の煩悶が政治的動搖の反映であるように、それぞれの性のありかたを問題とすることで現象の本質に迫ろうとするものではなく、現象のありのままの記述に過ぎない。

『動搖』は、當時の性的に解放的(むしろアーナーキスティ

茅盾の性慾描寫論と『蝕』『野薔薇』における性愛(三枝)

ックといえる)になった人々の意識や行動を描いた小説として讀むことも十分可能であるし、またそこに作者の性への深い關心やこの問題に對する鋭敏さを見てとれるが、しかしそれは、意識的に性關係の病理や「病的性慾」を扱った小説でもない。

### 創造

『創造』は一九二八年二月、ちょうど『動搖』を書き終え『追求』を手懸ける前に書かれた茅盾の最初の短編小説である。『創造』は、ある中産階級の男が、純情無垢の娘と結婚して彼女に教育を施し、彼女を自分の理想にかなった妻にしたてあげるが、彼女は夫の好まぬ政治活動に携わろうになつて、かえつて夫を失望させるといふ話である。『創造』は戯曲ではないが、茅盾は晩年回憶録の中で、この短編小説をフランス古典劇の「三一一致の法則」に従つて書いたと述べている。彼が空間や時間に自ら制約をはたして『創造』に取り組んだのは、社會の大きな流れを描いた『幻滅』『動搖』という二篇の長編小説の一定の成功に立



つて、今度は短編作家としての力量を自ら試す意味合いがあったためであろう。事實、『創造』は『幻滅』『動搖』とは異なる様な試みが見られる。冒頭は、舞臺となる部屋の詳細な描寫である。机の上に置かれた物から始まり、脱ぎ散らかされた女性の衣服、さらには化粧品などの小物類の一つ一つに到るまで、視線の移動を十分に計算に入れないながら擬人化の手法も用いて、それだけで若い夫婦の居間兼寢室というエロティックなムードをかもしている。また、登場人物の回想を多用したり、主人公嫺嫺の肢體やしぐさの描寫にエロスが漂う。中國に從來なかつたこれらの手法には、おそらく何らかの西歐近代小説の影響が考えられる。また、そのテーマは、新しい知識を注入された嫺嫺が、保守的な夫の限界を乗り越えて、社會變革へと歩み出したところにある。嫺嫺がその後どうなったかは、小説ではわからぬままだが、『幻滅』『動搖』に比べ、より樂觀的な姿勢がそこには見られる。

まずはじめに、嫺嫺の初夜の回想の描寫を見てみよう。

そのピンクの小さな丸い花びらは、彼女の眉間に、

口元に、うなじに舞い下り、——さらに襟元の微かな隙間から滑り落ち、乳房の上端に張り付いた。嫺嫺はこの花びらにそつと觸れられるたびに、それが初夜の君實の愛撫のように思え、魂がふるえ、妙に甘美な思いにとらわれた。まるで電氣が走って、彼女の細胞の一つ一つ、神経纖維の一本一本、細い細い血管の一本一本から、感じ取れるほんの微かな感觸や音に至るまで、大自然の春の氣にしばれたように、頭の隅にしまいかまれていたほんの些細なことまでも思い出されてきた。同時に、一種の神祕的なエネルギーが頭の中に沸き立った。無数の思いがふつふつと沸きあがり、ある甘酸っぱさが彼女の心を満たした。言葉にしたい無数のことがありながら、一言も出てこなかった。

いま假に右のように翻譯したが、原文は中國語としてはかなり歐化した文體であり、それだけでも随分モダンな印象を受ける。初夜の回想とはいっても、行爲の描寫はまったくなく、嫺嫺の感覺——それも一つ一つの感覺器官が受けた刺激ではなく、一種の陶酔感としての——だけから描

いており、きわめて高度な表現になっている。また、「細胞」「神経繊維」「血管」といった生理学上の用語や「電化」(譯では「電氣が走って……しびれた」とした)という言葉を用いているが、おそらくそれは『幻滅』でも述べたように)西歐の小説からの影響と思われる。

いま挙げた例が『創造』では唯一性交を暗示させる部分であり、ほかには性交の描写はないが、それにかわって『創造』ではエロティックな雰圍氣を持つ描写が豊富である。

「ソファには女物の衣服が亂雑に重なっている。空色のサテンの旗袍、黒絹のチュッキ、綿の白い胸あて、それに腿と腰の部分を紐でくくる緋色の半ズボン、これらがみな一つにまるめられ、ちょうど洗濯場で漂白槽に入れられるのを待っているかのようにであり、主人が脱ぎ捨てた時の慌ただしさがうかがえた。

「彼は、重い目をパッと開け、身體をわずかに動かした。かぐわしい髪の高い強い香りが彼の鼻を突いた。彼は本能的に顔を向けると、夫人はまだ目覺めず、兩の

茅盾の性慾描寫論と『蝕』『野薔薇』における性愛(三枝)

ほほが今にも血を吹き出しそうに眞つ赤なのが見えた。身體に掛けていたふとんはとくに一方にまくられ、この若い妻は今ほ身體を横にしていた。身につけているのは膝まである肌着のベスト一枚だけなので、腕や腿はみな朝の空氣にさらされて、珠絡紗から漏れた太陽の光が彼女の白い腿に落ちて、水の珠が跳ねているようだった。

「タンスの大きな鏡は女主人の潑刺とした美しい姿をはち切れんばかりの元氣さで映し出した。化粧臺の三面鏡は、女主人の雪のような肌を映すのは自分の職掌とばかりに嫉妬しているかのようにであった。

「この時、彼女はもう左にあるソファに腰掛け、ストッキングを片方腰まで引きあげた。ウールの肌着の長いベストの裾がわずかに開き、肉の熱い香りがあふれだした。

いま挙げた引用は一部にすぎず、ほかにもこのような短い描寫が各處に見られる。問題はこうした描寫が持つ意味である。それらが「中國文學内の性慾描寫」で主張される

「病的性慾の表現」と異なるのは明らかであろう。また『幻滅』の章靜と強猛のような新婚夫婦の喜びを描くためのものでない。『創造』は後に他の四篇の作品とともに處女短編集『野薔薇』に收められるが、その序文である「寫在野薔薇的前面」の中で茅盾は、「この中の五篇の小説はみな『戀愛』の外衣をままとっている。作者は、各人の戀愛行動の中に各人の階級的『意識形態』を明らかにしたかった。ただ公平な讀者は、あるいはきつと戀愛描寫の背後に重大な問題があるのを感じてもらえるだろう。」と述べている。文學作品は本來全體として理解すべきであつて、作品の一部だけを取り上げてあれこれ詮索すべきではないのかもしれない。短編小説であればそれはなおさらのことであろう。とはいへ、いま挙げた例が階級的意識形態を明らかにする上で本當に必要なのだろうか。

『野薔薇』の出版後になるが、茅盾は『婦人雜誌』一九三一年一月號に、「問題は封じられたまま放置されている」という一文を寄せ、その中で中國における「女性美」の基準が變化していると指摘している。封建思想に基づく女性

美が「靜的な美」・「病的な美」であるのに對し、大都市に生れた「中堅階級である『市民』」は、「動的健康的で肉感に富んだ刺激的な女性美」を求めている。それは「市民」の意識形態と土豪劣紳や地主のそれとが異なるためであると茅盾は説明づけている。茅盾がこの「動的健康的で肉感に富んだ刺激的な」女性の出現に、中國の資本主義の發展を見ていることは確かである。ただ、婦人解放の面からは、このような女性たちを、彼はあまり評價してはいない。しかしただそれだけに過ぎないのだろうか。婦人解放論者としての茅盾が、解放の主體として自覺的なインテリ女性や婦人労働者を考えていたのは確かである。しかし彼の他の作品を見ても労働する女性の美しさを丹念に描寫したものはない。また、封建的思想を徹底的に批判する茅盾であるから、彼が「靜的な美」「病的な美」に惹かれたとも思われない。茅盾は、この新しい女性美がもてはやされるのと同じ來源から、女性の運動選手が喝采を受けていることを述べており、少なくとも「動的健康的で肉感に富んだ刺激的な女性美」そのものは否定していない。ただ、この新しい

女性美をあまり高く評價せぬよう讀者に注意を促しているのだが、それは心ある者にはいわずもがなのことである。

むしろ彼がこのような話題を敢えて取り上げたこと自體に、階級的な議論とは別に、「動的健康的で肉感に富んだ刺激的な」女性に心惹かれる著者の女性美の好尚が現れていると言えまいか。『創造』における女性美や新しいエロスの探求は、「問題は封じられたまま放置されている」で示された矛盾の女性美への鋭敏さと無縁ではないはずである。

『創造』は全體として見れば、確かに小資産家階級の價値觀を受け入れた嫺嫺が革命へと傾斜したことを描いているが、若い夫婦の寢室が持つ特別なムードを、脱ぎ散らした衣服によって表したり、擬人化された家具にそれを語らせたり、女性の下着姿を丹念に描寫する手法は、新興「市民」の嗜好を「解明」していないとは言えぬにせよ、そうした目的意識よりはむしろ、彼がひそかに心惹かれた「動的健康的で肉感に富んだ刺激的な女性美」や都會的エロスそのものを表現しようとしたのだとするほうが理解しやすい。

矛盾の性慾描寫論と『蝕』『野薔薇』における性愛（二枝）

## 追求

『蝕』の第三部『追求』は、大革命に夢破れた青年たちを描いて他に比類のない作品である。その性愛描寫は物語も終りに近い第七章にある。病に蝕まれた貧弱な肉體は、史循に激烈な政治活動に従事することも、感覺的肉體的欲望に浸ることをも許さない。失戀に打ちのめされ、やがて來る死を待つことにも耐え切れずに、史循は自殺を試みる。未遂に終り病床にある彼を看護したのが女友達の章秋柳である。全快した史循は再び生の意慾を取り戻すが、その際に求めたものが生活慾に溢れる章秋柳の愛情と肉體である。二人は上海郊外に行き二晩を過ごす。

史循は（中略）章女士を胸に抱き寄せ、首に接吻した。まるで一團の炎が胸の中で爆發したように身體中がすぐ熱くなって血が駆け巡り、勇氣がみなぎった。章女士を見ると、口元の笑みはこわばり目は潤んでいる。電燈の光が胸におちてブラウスを透かし、胸の高鳴りが見えるようだった。（中略）史循は顔を上げ、

勇氣を出して氣まずそうな視線を章女士の顔に向けると、それからゆっくりと視線を下げていった。視線がそこに來るとまるで電氣に觸れたように猛然と飛びかかり、狂ったように章女士の腰に抱きつき、脣を押し付けた。

章女士はひどく驚いた。色情狂の發作という言葉が頭をかすめ、史循がいまにも噛み付くのではと思ひ本能的に身を引いたが、史循は死にもの狂いで抱き着いて放そうとしなかつた。

『追求』の性愛描寫は『幻滅』のそれと同じく客觀描寫が中心であり、描寫に趣向を凝らした『創造』とは對照的であることがわかる。貧弱な肉體では章秋柳の慾望を満たせぬと感じた史循は、過去の苦い經驗を思い出して絶望に陥るが、章秋柳は彼を慰めて落ち着かせる。二人の性交の描寫は『幻滅』のそれに近い。

「そして酒の力の助けを借りて、過去を忘れ未來に苦慮することもなく、全身全靈を傾けて現在の刹那的な肉の狂歡に沈んでいった。

「この一夜もアルコールの暴力と熱情の渦の中でずっと過ぎていき、疲勞の極の模糊とした中でぼうっと意識を失った。

史循が章秋柳の肉體を求めるのは、肉慾の充足に目的があるのではなく、自己の再生を確認し彼女の生活慾を自分のものとするためにそれが是非必要だったからである。章秋柳もそれを理解していたからこそ、彼の要求を受け入れたのである。その意味で、第七章の旅館での場面はどうしても描く必要があつたと考えられる。しかし、茅盾が『創造』で試みた表現上の技巧を『追求』の性愛描寫では用いなかつたのは、長編短編という小説の性格上の違いもあるが、そのこと以上に、作者の本來の目的が史循と章秋柳という二人の人間の思想と行動を描くことであつて、二人の情交はその一部に過ぎないと見ていたためであろう。それは、『追求』は一九二八年初春の知識分子の病態と迷妄とを暴いたものである。」という「從牯嶺到東京」の茅盾の言葉からもうかがえるからである。

『追求』には、革命に夢破れて自暴自棄になつた若者が

何人も登場するが、章秋柳もそのような一人である。反逆精神に富むこの二六歳の女性は、希望を托した大革命が失敗に歸すと、あらゆる快樂と刺激とを享受したいと願ひそれを實行するが、刺激の新奇さに慣れ、快樂にも倦怠を感じる。そんな折、史循の自殺未遂に出くわし、彼の再生に慰めをみつける。面白いことに、茅盾はすでに一九二一年にはこの章秋柳のような若者の生態を「享樂主義的青年」と題する短い文章で論じている。享樂主義とは、政治反動が強まる中で社會變革の展望を見失つた青年が、性の快樂に逃避することを言うのであるが、茅盾はそこに社會的背景が存在することを指摘した上で、青年が享樂主義の道を歩まぬよう希望している。そこで述べられる享樂主義の青年の姿は章秋柳に驚くほどよく當てはまる。ただ、章秋柳が史循の願ひを聞き入れるのは、彼女の享樂的人生觀が大きく作用しているにしても、單純に性への逃避とはいえない。とはいえ、茅盾が章秋柳の思想や行動の背後に社會の病理を見ていることも疑いない。

『追求』は、性慾描寫を通して「社會的心理的病を研究

茅盾の性慾描寫論と『蝕』『野薔薇』における性愛(二三)

する」というよりは、むしろ社會的背景を持つ青年の「病態」を描くうちに必然的に性愛描寫にまで筆が及んだと考へるほうが自然であろう。章秋柳が史循の願ひを聞き入れるのは、いま述べたように單純に性への逃避とはいえず、史循と關係したことをもってすぐに「病的性慾」であるとか「病態」であるとは呼べない。一方、媚薬を用いてでも自己の性的・肉體的コンプレックスを振り拂い、再生の證を手にしようとする史循は「病的性慾」といつてよいし、「社會的心理的病の研究」に近いといえよう。

#### 詩與散文

『詩與散文』は、貞淑な未亡人桂奶奶の物語である。彼女は、下宿人の青年丙に誘惑され肉慾に溺れてゆくが、彼女と青年丙を争っていると思つた丙の従妹が、丙を愛してないとわかるや彼女は決然と丙を捨ててしまふ。未亡人と青年との道ならぬ關係を描く『詩與散文』は、茅盾の作品としてはエロティックな雰圍氣がもつとも濃厚な短編である。そのことについて茅盾は「寫在野薔薇的<sup>89</sup>前面」の中

で、「何人かの友人は『詩與散文』はたいへん肉感的である  
と思ひ、ある者は單純に性慾を描寫して誘惑に近いと  
考へてゐる。これらの好意ある忠告には、私はたいへん感  
謝してゐる。」と述べるだけでこの問題をかたづけしてしま  
い、すぐに作品の意圖へと論點を換へてしまふ。しかし、

『詩與散文』にはやはり濃厚なエロスが漂つてゐる。

矛盾は短い作品の中にいきなり性愛描寫を持ち込むこと  
の不自然さを避けるためか、青年の夢の中に初めての情事  
の有様を再現する手法を用いてゐる。

「桂奶奶、あなたの言葉を待つていたんですよ。」

返事はひそやかな低いため息だった。が、長い眉毛の  
端はほんのりと赤くなつてゐた。

これらがみな電流のような速さと力で青年丙の體中  
を走り抜け、頭の中から最も細い神經纖維まで緊張に  
ビリビリと震へた。彼は左手をそつと差し伸べ彼女の  
腰にまわした。彼はおそおそと薄ものの絹一枚が覆う  
だけのあの柔らかく突き出した彼女の胸を自分に押し  
付けようとした。酔つたようにぼんやりとした目には、

桂奶奶の目や鼻や口もとさらにはうなじから、金色の  
小さな星が泡のように浮かんで来て、部屋中に満ちあ  
ふれるのが見えた。(中略)

「晝はがっかりだったよ。君はあんなにいやがった  
じゃないか。」

「うらんでゐる？」

「そんな、うらんでゐるだなんて。」

彼はどうやって自分の感激や喜びや興奮を表せばよ  
いのかわからなかつた。彼は狂つたように感覺器官の  
快樂を汲み取つた。それから旋風のような官能の刺激  
の頂點の中で、ふいに底知れぬ深淵に落ちていつたか  
のように……

刺激を電氣にたとえたり、「神經纖維」「感覺器官」とい  
つた言葉を用いて青年丙の感覺を中心に描寫する手法は、  
『創造』と同様であり、客觀描寫が主體の『幻滅』や『動  
搖』の性愛描寫とは異なることがわかる。また、夢や追憶  
を借りて性體驗を描寫する手法は、『創造』『詩與散文』の  
ほかに『自殺』にも見られる。登場人物の秘めた思ひを夢

や追憶として描くことは、短編という限られたスペースの中に性愛描寫を無理なく取り入れるために有効なテクニクである。行爲の描寫よりも感覺描寫に重點が置かれるのも、同じ理由によると思われるが、それは同時に客觀描寫だけでは描ぎきれぬ個人の意識に反映された内面の眞實に迫る上でも有効な方法であり、矛盾は十分にその効果を意識しながら感覺描寫を用いていると思われる。もちろん、「虚寫」と「情理の内」を守りながら更に表現上の發展を求めれば、おのずと感覺描寫・心理描寫に向かわざるを得ないことも確かではあるが。ただ、それが「寫在野薔薇的前面」でいう「階級的『意識形態』」の解明に是非とも不可缺かという点、問題はまた別である。

青年丙の「青春の快樂の權利は神聖である」という信念を注入されることで、貞淑な未亡人桂奶奶ははじめて「自分」というものを發見し、自己の意志に従って、行動を始める、というのが『詩與散文』で作者が訴えたかったことであろう。封建的價值觀に支配された小資産階級の未亡人（桂奶奶は家主である）が、ふとした「過ち」から自己に目

茅盾の性慾描寫論と『蝕』『野薔薇』における性愛（二）

覺め新たに行動を開始するのは、確かに「階級的『意識形態』」と關係があるだろう。しかし、若者が未亡人を誘惑するという話自體が持つイメージや、物語が青年丙の側から描かれ、桂奶奶の心理の變化が讀み取れないことなどから、『詩與散文』が「肉感的で誘惑に近い」と言われる側面が強いのも事實である。青年丙の夢の描寫だけを問題とするならば、それが「階級的『意識形態』」の解明にどうしても必要であったとは考えられない。むしろ、作者が性愛描寫をしたいためにそれを行なった、エロティックなムードに何かしらリアリティーを興えるために描いたと考えるほうが自然であるように思われる。その點では、『詩與散文』は『創造』の系列に屬する作品といえよう。

#### 四

すでに考察したように、性愛描寫において矛盾は、「虚寫」と「情理」とを尊重するという態度を一貫して守っているが、性慾描寫の目的を「社會的・心理的病的の研究」のための「病的性慾」の表現に置く矛盾の理念は、作品の中で



は必ずしも實現されていぬ。むしろ、茅盾はあまりそれに拘泥しなかつたといつたほうが適切かもしれない。いまその原因を女性主人公の性意識のありかたから考えてみたい。

茅盾は、小説の中で多くの女性像を作り上げてゐる。彼は『蝕』『野薔薇』に登場する女性をいくつかのタイプに分類してゐるが、性觀念から見るならば、興味深いことに彼女らはみな傳統的な性道徳・儒教的な價値觀に縛られることがない。『詩與散文』の桂奶奶でさえ登場した時點ですでにそれを振り捨ててゐる。彼女たちは未婚既婚の別なく、いずれも男性と性的關係を持つこと自體はごく自然な事と考へてゐるようで、そのことが内心の葛藤を引き起こしはしない。『動搖』の孫舞陽、『追求』に現れる章秋柳、『虹』の主人公梅行素などはその典型と言つてもよい。『幻滅』の主人公章靜はおとなしい靜かなタイプだが、それでも強猛との結婚にあたつてうしろめたさを感じてゐないのは前に觸れた通りである。茅盾の描く女性像の中に、男性不信を強く抱く女性はいても、セックスに對してはつきりと嫌

惡を示す者はいない。むしろ、ほとんどすべての女性は、性に對する本能的なあこがれや慾求を持った存在として描かれてゐる。これらのことは、彼女たちが完全に解放された性觀念に従つて思考し行動したことを示してゐる。だが同時に彼女たちの中には、『テレーズ・ラカン』のテレーズのように情夫と謀つて夫を殺してしまふとか、『ナナ』の主人公ナナのように次々と情夫を破滅させるといつた、性に關して何か偏執的な興味や慾望を抱いてゐる者は一人もいない。テレーズやナナはその氣質や遺傳によつて知らず知らずのうちに破滅への道を歩むのである。「病的」とは、本來無自覺であるからこそ「病的」なのである。だからこそテレーズやナナは「病的性慾」に侵されてゐるといえる。一方、奔放な孫舞陽、享樂主義の章秋柳は、確かに時代の中で苦悶する女性ではあるが、しかし自己の思想と行動を客觀的に見ることもできるのであつて、氣質や遺傳、慾望の完全な奴隸ではない。つまり、茅盾の描く女性はその點では「健康」であつて、ただ彼女たちは性をあまりに普通にまた自然に受け入れてしまつた女性であるに過ぎない。

茅盾が實際に作品の中で描いたのは、ゾラの作品に見られるような病理ではなく、主として健全な肉體に宿る性的な關心や性慾さらに性の喜びであった。だから彼の作品は、「病的性慾」を追求しようにもはじめから不可能だったといえよう。すでに見たように、時代が青年たちにもたらした様々な影響を念頭に置いて茅盾が作品に取り組んでいたのは事實である。しかしそれが「中國文學內的性慾描寫」で主張された社會的的心理的病的の研究としての「病的性慾の表現」にまで至らなかつたのは、このような點に大きな原因が潜んでいるのではなからうか。

では、「中國文學內的性慾描寫」での茅盾の主張はまったく無駄であつたのだろうか。性愛そのものを描寫の目的としないゾラの論理は、社會の闇黒を積極的に描こうとする自然主義の主張と一致するし、またそのことよつて世間から猥褻であるという非難を受けなくて済む。茅盾はこのような論理を「中國文學內的性慾描寫」の中で採用することによつてはじめて性愛描寫という厄介な問題を正面から論じられたのであり、かつまた性愛描寫の積極性を主張

できたのである。考察してきたように、茅盾の作品は彼の性慾描寫論とは一致しないのだが、「寫在野薔薇的前面」を引くまでもなく、彼自身はおそらく自己の理念に従つて性を扱つたと考えていたのだろう。またそうでなければ書けなかつたはずである。その點で「病的性慾の表現」という硬質な論理は、彼が性を作品に持ち込むことを合理化する上で、大きな役割を果たしたはずであり、決して無駄ではなかつたと言えよう。

#### むすび

茅盾は、早くから文學と性の問題に關心を持ち、文學として性を取り上げる必要性を主張した。さらにあるべき性の取り上げ方として、彼なりの性慾描寫の目的論——病的性慾の表現を通じて社會や心理の病理を研究する——と、「虛寫」と「情理」を重視した描寫方法とを提出した。それは、性を戀愛の一部として正當に評價しようとする茅盾の戀愛觀が背景をなし、その上に社會の病理の解明を目的として性を大膽に扱つた自然主義の小説とその文學觀が彼

に影響を及ぼして生れたものである。作家としての茅盾は、「虚寫」と「情理の内」という態度は一貫して守ったが、ゾラ的な性の取り上げ方に必ずしもとられず、病理よりもむしろ性のありのままの姿に着目し、描寫に意を用いながら作品化していった。『蝕』『野薔薇』以後も茅盾が性に關心を抱き續けたことは、長編の『虹』『腐蝕』『霜葉紅似二月花』や、短編『水藻行』『煙雲』などの作品からおおよそ推測され、茅盾の文學における性の問題は、さらに探求されねばならぬの言うまでもない。ただ、描寫の生々しさでは本論文で取り上げた五篇は彼の多くの作品の中でもとりわけ注目に値し、性愛描寫では頂点をなしている。茅盾は「寫在野薔薇的前面」で彼が目指した戀愛を通しての「階級的『意識形態』」の解明が充分満足にいかなかったと率直に認めているが、そのような認識が『野薔薇』以降の小説で描寫への踏み込みを鈍らせたのだと思われる。とはいえ、中國における性愛描寫の新しい展開に、茅盾が大きな位置を占めることは動かぬ事實である。また、性がタブーとされる中國で積極的に性について論じ、また常に男

性の側からしか問題とされなかった性を、女性の側から描いて見せたことは、眞に劃期的なことであつた。性を文學として扱ふことは、茅盾自身ままならぬものであつたにせよ、二十年代の初めから性と文學の關係を正面から論じ、さらに作品の中で實踐したことはおおいに評價されるべきであるし、それ自體は今後も探求されるべき課題としていままなお中國現代文學に残されているのである。

注

- (1) 「茅盾」は、作家沈雁冰(雁冰は字、名は德鴻)の數多い筆名の中でもっとも有名なものである。この筆名は、一九二七年九月發表の『幻滅』に初めて用いられた。本論文では便宜的に『幻滅』の發表以前についても「茅盾」の名を用いた。
- (2) 『野薔薇』は、一九二九年五月に大江書舖より出版された五篇からなる茅盾の處女短編小説集である。その五篇の題名と掲載誌、發表年月を以下に掲げる。『創造』、『東方雜誌』第二五卷第八號 一九二八年二月。『自殺』、『小説月報』第十九卷第九號 一九二八年九月。『一個女性』、『小説月報』第十九卷第十一號 一九二八年十一月。『詩與散文』、『大江』第一年第三期 一九二八年十二月。『曇』、『新女性』第四卷第四號 一九二九年四月。本論文では、『創造』『自殺』『一個女性』

は原載誌に依り、残りの二篇は『茅盾全集』第八卷に依った。  
 『蝕』は、『幻滅』『動搖』『追求』の三篇の長編小説で構成され、『蝕』はその総題である。一九三〇年五月に開明書店から出版された。各篇の掲載誌、發表年月を以下に掲げる。  
 『幻滅』、『小説月報』第十八卷第九・十號 一九二七年九月・十月。  
 『動搖』、『小説月報』第十九卷第一・二・三號 一九二八年一月・二月・三月。  
 『追求』、『小説月報』十九卷第六・七・八・九號 一九二八年六月・七月・八月・九月。本論文では、開明書店版『蝕』(民國二十九年普及本第五版)を用い、必要に應じて『小説月報』、『茅盾全集』第一卷、『茅盾文集』第一卷を参照した。

(4) 「新道德」の文字が最初に現れるのは、一九二〇年二月五日發行の『婦女雜誌』第六卷第二號に發表した「男女社交問題管見」においてである。ここではエレン・ケイによる「貞操の新定義」として紹介している。貞操に關する茅盾の言及は多くあるが、彼が最終的にこの問題の結論として書いたと思われるのは、一九二五年一月五日發行の『婦女雜誌』第十一卷第一號に發表した「新道德的唯物史觀」である。この中で茅盾は貞操を全面的に否定し「新道德」として戀愛の神聖と離婚の自由を主張している。

(5) 『時事新報・學燈』一九一九年十月二十九日。署名は雁冰。  
 附注、「此篇所有『戀愛』指性的戀愛、所有『愛情』指普通所謂愛」。原載紙未見。『茅盾全集』第十四卷に依る。

茅盾の性慾描寫論と『蝕』『野薔薇』における性愛(三枝)

(6) 『解放與改造』第二卷第十五號、一九二〇年八月一日。原文、

我國小説戲劇、素喜描繪男女狎蝶之事、則崇拜毛柏桑搓拿之寫實主義自然主義文學家、恐亦有效法法人之趨向、此則甚宜引以為戒者也。

(8) 『東方雜誌』十七卷十八號、一九二〇年九月二十五日。署名は雁冰。

(9) 原文、

如謂胡君所詆之醜惡描寫文學為言男女事之文學。則余以為西洋描寫男女事之文學。固未有如中國演義小說動言及生殖器也。中國并此類小説而有之。則青年道德墮落之責。當在此而不彼。且男女之事。人生之一神秘也。關之不可閉之不能。中國惟薦紳先生。羞以為言。故眞寫愛情生活兩性關係之書。無一冊。而誨淫之書。乃多如牛毛。余故以為男女關係非不可描寫。特不應如中國之金瓶梅等。中國小説凡言情愛。即涉於淫褻。正當引西洋男女關係之小説。以矯其弊。不宜反拒而不受也。

(10) エミール・ゾラ「テレーズ・ラカン 再版の序」、一八六八年五月。

(11) 『小説月報』第十三卷第七號、一九二二年七月十日。署名は沈雁冰。

(12) 注(11)に同じ。

(13) 注(10)に同じ。翻譯は、岩波文庫『テレーズ・ラカン』下(小林正譯)の「再版の序」に依る。一五三頁。

- (14) 注(13)同書一五七頁。
- (15) 徐調平「『小説月報』話舊」(『文藝報』一九五六年第十五號)はその間の事情を記す。また、查國華『茅盾年譜』(長江文藝出版社、一九八五年)によれば、「中國文學內的性慾描寫」は僅かに百餘冊が削除されなかつたのみという。
- (16) 注(3)参照。
- (17) 短編小説集『野薔薇』所收。注(2)参照。
- (18) 短編小説集『野薔薇』所收。注(2)参照。
- (19) 『幻滅』第十三章。
- (20) 佐藤一郎「中國における近代ロマンの出發點——茅盾の『蝕』をめぐる」、『北斗』第一卷第二號、一九五四年十二月十五日。
- (21) 『動搖』第六章。
- (22) 『動搖』第十二章。
- (23) 『動搖』第九章。
- (24) このことについて茅盾は、「從牯嶺到東京」(注(26)参照)の中で繰り返し述べている。
- (25) 例えば、「男女社交問題管見」(『婦女雜誌』第六卷第二號、一九二〇年二月五日)、「戀愛與貞操的關係」(『民國日報・婦女評論』、一九二一年八月三二日)。原載誌紙未見。兩者とも『茅盾全集』第十四卷に依る。
- (26) 『小説月報』第十九卷第十號、一九二八年七月十日。
- (27) 注(1)に同じ。

- (28) 「寫在野薔薇の前面」は短編小説集『野薔薇』の代序として書かれた。一九二九年五月九日執筆。短編小説集『野薔薇』は未見。『中國當代文學研究資料 茅盾專集 第一卷・下冊』(福建人民出版社、一九八三年五月)に依る。
- (29) 『動搖』第七章。
- (30) 『小説月報』第二〇卷第四號、一九二九年四月十日。署名は丙生。短編小説散文集『宿舂』(大江書舖、一九三一年五月)所收。
- (31) 茅盾「回憶錄〔十〕 創作生涯的開始」、『新文學史料』一九八一年第一期。
- (32) 參考に原文を掲げる。  
 那淺紅的小圓片落在她的眉間，她的嘴唇旁，她的頸際，——又從衣領的微開處直滑下去，黏在她的乳峯的上端。嫻嫻覺得這些花瓣的每一個輕妙的接觸，都像初夜時君實的撫摸，使她心靈震撼，感着甜美的奇趣；似乎大自然的春氣已經電化了她身上的每一個細胞，每一條神經纖微，每一枝極細極細的血管，以至於她能够感到最輕的拂觸，最弱的聲浪，使她記憶起塵封在腦角的每一件最瑣屑的事。同時一種神秘的活力在她腦海裏翻騰了；有無數的感想滔滔滾滾湧上來，有一種似甜又似酸的味兒灌滿了她的心；她覺得有無數的話要說，但一個字也沒有。
- (33) 注(1)参照。
- (34) 注(28)に同じ。

(35) 「問題は原封不動地擱着」、「婦女雜誌」第十七卷第一號、一九三一年一月一日。署名は朱環。原載誌未見。『茅盾全集』第十五卷に依る。

(36) ただし、『茅盾文集』第一卷（人民文學出版社、一九五八年）及び『茅盾全集』第一卷（人民文學出版社、一九八四年）所收の『追求』では、章秋柳と史循の情交の場面は完全に削除されている。

(37) 注(26)に同じ。

(38) 『民國日報・婦女評論』、一九二二年十二月十四日。署名は佩韋。原載紙未見。『茅盾全集』第十四卷に依る。

(39) 注(28)に同じ。

(40) 「從牯嶺到東京」の中では、『幻滅』『動搖』『追求』の三篇に登場する女性が多いが、私は二つのタイプの女性を描くことに力を注いだ。靜女士と方夫人とは同タイプの女性である。慧女士、孫舞陽と章秋柳とは同タイプの女性である。また、「寫在野薔薇的前面」では、「嫻嫻と同様に、桂奶奶も剛毅な女性である。環境が變わりさえすればこのような女性は革命的になれるのである。『自殺』の環小姐と『曇』の張女士はともに軟弱な性格であり、それで彼女らの結末は間違としていたのである。」とあり、茅盾が女性を幾つかのタイプに描き分けていたことがわかる。

(41) 茅盾は回憶錄（『創作生涯的開始』、注(31)に同じ）の中でも同様のことを述べている。

茅盾の性慾描寫論と『蝕』『野薔薇』における性愛（三枝）